

## HU VISION 2030の実現に向けた取組に係る進捗状況報告

質保証推進本部長 山口 淳二

### 【HU VISION 2030】

世界共通の目標である「持続可能なWell-being社会」の実現のため、2030年をターゲットイヤーとした本学独自の中期的ビジョンとして2023年度に策定した。本学の科学技術における教育・研究の卓越性“Excellence”と、教育・研究を社会に広げ地域課題を解決する社会展開力“Extension”の2つを原動力として、大学自身のイノベーションを起こして大学改革の好循環を生み出すエコシステムを創成するための先導的取組の指針を、8つの観点別VISION（1. 教育、2. 研究、3. 社会との共創、4. 国際協働、5. ダイバーシティ、6. ガバナンス、7. 財務基盤、8. 持続可能性の追求）として高い解像度で提示している。

### 【確認方法】

各施策の推進による教育研究等の改善及び向上を促すことで2030年のビジョン実現を目指すとともに、第5期中期目標・中期計画の策定に活用することを目的として、HU VISION 2030（以下「VISION」という。）に示す先導的取組の指針である8つの観点別VISIONに係る取組の2025年6月時点における進捗状況を確認するとともに、HU VISION 2030の実現に向けた各構想の実施状況について3段階（ABC）の自己点検・評価を行った（進捗状況一覧は下表を参照）。

## 【総評】

VISIONは、2030年をターゲットイヤーとする本学の中期的ビジョンとして2023年度に策定され、現在3年目を迎えている。

本報告は、VISIONで示す先導的取組の指針である8つの観点別VISIONの構想毎に、関連する第4期中期目標・中期計画の実施状況及びその他の実績を踏まえ、VISIONの実現に向けて2025年6月までの間に本学で実施された戦略的な取組やアウトカムの状況について整理し、各構想の実施状況を明らかにした上で、自己点検・評価を実施したものである。

全体的な状況としては、8つの観点別VISIONの各構想全てにおいて、構想に関連する取組が十分に実施されている又は当初予定を上回って実施されていると言える。多くの観点に共通しているのは、本学の特長を活かしたSDGsへの貢献を含むサステナビリティに関する取組が実施されていることであり、「持続可能なWell-being社会の実現」に向け、「北海道大学サステナビリティ宣言」の下、本学の教職員・学生等を含む全ての構成員に対する学内エンゲージメントの醸成や、本学の総合力の向上が図られていると判断できる。本学の多様で広大なフィールドを活かし、部局間の連携によりSDGsに関連する教育・研究活動が行われていることの成果は、「THEインパクトランキング2025」総合ランキング世界同率44位、6年連続国内1位の獲得として表れている。

また、本学における新たな挑戦として次世代半導体分野の人材育成及び研究力向上に係る取組が開始されており、北海道が推進する「北海道デジタルパーク」構想の実現に資する重要な活動となっている。

ガバナンス強化についても、2024年度に設置した経営企画本部において、総長並びに総括理事に対する支援機能を強化し緊密な連携を担保するとともに、学内外の情勢を的確に把握し、戦略的に企画及び調整を行うことで、本学の円滑な運営の推進及びVISIONの実現に向けた組織の強化が図られている。

緊急性が高い課題である大学の財務状況改善についても、戦略的な資金運用の実現に向けた新たな方策として、中長期的な視点による運用規模の拡大を目的に株式を含めた委託運用を開始し、財務基盤の強化が図られている。

教育面では、博士人材育成コンソーシアムの活動の推進、フェローシップ制度による経済的支援及び新渡戸カレッジ、Hokkaidoサマー・インスティテュート等による質の高い国際教育プログラムの実施を通じ、グローバル社会や地域社会で活躍できる高度専門人材の育成が図られている。

研究面では、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」の採択によるフィールドを活用した環境再生を促進するリジェネラティブな持続的食料生産システムに関する研究の実施や、カーボンニュートラルの実現に向けたグリーントランスフォーメーション先導研究センターの構築などにより、卓越研究の推進と地域創生を目指した活動を開始している。さらに、プレパンデミックワクチンの開発による国家備蓄への貢献、国産初の経口COVID-19治療薬「ゾコーバ」の社会実装等、国家安全保障に寄与する重要な成果も得られている。

また、アイヌ民族に関する歴史的経緯を踏まえた講義等をはじめとするDEIへの全学的な意識醸成と環境整備についても、「北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン宣言」の実現に向けた重要課題として実施している。

以上のことから、VISIONの実現に向け、全体を通じて適切に取組が実施されていると評価できる。引き続き、総長の強いリーダーシップの下、「持続可能なWell-being社会の実現」に向け、全ての教職員が一丸となって、教育・研究の卓越性“Excellence”と世界・地域社会への展開力“Extension”を推進し、VISIONの早期かつ持続的な実現を目指すことが期待される。

なお、各観点における状況は次ページ以降に示すとおりである。



観点別VISION 進捗状況一覧

観点別VISION		各構想 自己評価		
		A	B	C
01 Education 教育	北海道大学は、自然豊かな環境のもと、多様な人々との交流を通じて、最先端の研究に基づく高度な専門性や、Society5.0をはじめとする多様な未来社会を共創するために必要な幅広い知識・スキルを身に付け、グローバル社会や地域社会で活躍できる人材を育成する。	2	5	0
02 Research 研究	北海道大学は、広大かつ多様なフィールドを有し、幅広い科学領域を網羅しているという強みを生かし、イノベーションや課題の解決を通じて、世界トップレベルの研究力を更に向上させる。	4	2	0
03 Co-Creation with Society 社会との共創	北海道大学は、社会との共創により、研究成果の創出や社会実装、地域と世界の将来を見据えた課題解決を推し進め、持続可能な発展やWell-beingの実現に貢献する。	6	1	0
04 International Collaboration 国際協働	北海道大学は、多様なバックグラウンドを持つ学生・研究者・教職員が活躍する国際的なキャンパスを実現し、様々な国・地域・組織の人々と連携・協働して世界の課題解決に貢献し、持続可能で豊かな未来社会を牽引する。	3	2	0
05 Diversity ダイバーシティ	北海道大学は、学内の多様性・公平性・包摂性を保証する観点で、大学の教育研究環境を整備するとともに優れた人材の育成に寄与し、「ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言」の実現に向けて邁進する。	0	6	0
06 Governance ガバナンス	北海道大学は、総長のリーダーシップを支える執行部の役割分担と緊密な連携により、適正かつ透明性の高い意思決定を行うとともに、構成員が誇りと希望と充実感を持って価値創造できる基盤を整備し、広く社会に認められる大学運営を実現する。	1	5	0
07 Financial Base 財務基盤	北海道大学は、多様かつ強固な財源の拡大による自律的経営と「人材・知・資金の好循環」による持続的成長を実現する。	0	5	0
08 Pursuit of Sustainability 持続可能性の追求	北海道大学は、広大で豊かなフィールドをもとに形作られたキャンパス環境を基盤とした物的・知的資産を最大限に活用し、教育・研究・社会との共創を通じて「持続可能な社会」を実現する社会変革を先導する。	4	1	0

※自己評価（HU VISION 2030の実現に向けた取組の進捗状況）

A	構想に関連する取組を当初予定を上回って実施している。
B	構想に関連する取組を十分に実施している。
C	構想に関連する取組を十分には実施していない。

<p><b>01</b> Education 教育</p>	<p>北海道大学は、自然豊かな環境のもと、多様な人々との交流を通じて、最先端の研究に基づく高度な専門性や、Society5.0をはじめとする多様な未来社会を共創するために必要な幅広い知識・スキルを身に付け、グローバル社会や地域社会で活躍できる人材を育成する。</p>
---------------------------------------	---

No.	構想	実施状況	自己評価
1	<p>優秀な人材を幅広く受け入れるため、入学者選抜を分析・検証し、多様な背景を持つ学生を対象とした選抜や多面的評価を利用した選抜の拡充など、<b>選抜方法等の工夫・改善を進める。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 総合型選抜「フロンティア入試」入学者の追跡調査と分析及び学修状況の検証</li> <li>・ 新学習指導要領に対応した「令和7年度からの入学者選抜について」策定</li> <li>・ 2025年度入学者を対象としたアンケート調査の実施</li> </ul>	B
2	<p>学士課程において身に付けるべき共通の素養として、コミュニケーション、チームワーク・リーダーシップ、創造性・チャレンジ精神、更には社会倫理・社会貢献の精神を涵養するため、<b>学部専門教育と連動した新たな教養教育プログラムを構築する。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教育改革室「学士課程次世代教養教育検討PT」において次世代教養教育の新たなカリキュラムの2028年度構築に向け検討</li> <li>・ 同PTにおいて、領域横断的な教養科目群の次世代教養教育「HU コンステレーション・プログラム」の2026年度実施に向け検討</li> </ul>	B
3	<p>社会に対して学生の学修成果を客観的・多角的に示すため、新たな達成度評価を導入するとともに、入学前から卒業・修了後までの多様な学修履歴を蓄積・分析することで、<b>学生が身に付けた能力の可視化を図り、あわせて教育効果の確認と改革の好循環を推進する。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新渡戸カレッジにおいて育成するべく掲げている力（学部：5つの力、大学院：3+1の力）を設定の上、「新渡戸ポートフォリオ」により学修状況の自己評価を実施</li> <li>・ 次世代教養教育における「教養教育で身につけるべき力」を策定</li> <li>・ 国際的通用性を有する「オープンバッジ」と、幅広い学修成果に用いることを想定した「北大バッジ」の2種のデジタル学修歴証明を導入</li> <li>・ EXEX 博士人材フェローシップ事業においてコンピテンス評価をポートフォリオシステムやオープンバッジの仕組みと併せて導入し、研究活動や教育プログラム等の参加を通じて学生が身に付けたスキルを可視化</li> <li>・ 学生の修得単位数に基づくディプロマ・ポリシーの達成度を可視化し、自己評価データも収集できる全学ポートフォリオシステムを2026年度から全学的に導入</li> </ul>	B

<p>4 学士課程から博士課程までの一貫したキャリア教育や企業等との交流を通じて、幅広いキャリアパスへの興味と意欲を引き出す取組を行うとともに、大きく変容する社会を先導する高度な博士人材「イノベーション・フロントランナー」を育成するため、他者との協働や新しい社会・産業の創出に資する社会実装力を養成する教育プログラムを展開する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院教育推進機構に博士人材のキャリア支援に特化した組織である「先端人材育成センター」を設置</li> <li>・社会との共創教育を実現する「共創教育センター」を設置</li> <li>・学部、修士、博士を一貫するキャリアプログラム構築に向けて、先端人材育成センターとキャリアセンターで定期的な協議を実施</li> <li>・キャリア支援をまとめたポータルサイト「北海道大学キャリアデザイン Navi」の運用</li> <li>・本学が代表機関として取組を進める「博士人材育成コンソーシアム」（連携 13 大学）が実施する 100 以上のキャリア教育プログラムを本学学生へ提供</li> <li>・「導入科目（北大での学び）」（本学の理念や歴史、キャリア教育）を学部初年次学生向け必修科目として開講</li> <li>・大学院共通授業科目「北大大学院での学び」（大学院での学びに必要な知識、技術、情報、キャリア教育）を大学院初年次学生向け必修科目として開講</li> <li>・学部から博士までの継続的なキャリア支援について討議する「キャリア支援シンポジウム」の実施</li> <li>・学部から博士まで一貫したより効率的かつ効果的なマネジメント体制（大機構と高機構の統合）の構築について検討</li> <li>・大学院生を対象とした個別のキャリア面談等を実施</li> <li>・大学院生を対象に「博士進学予定者向け」「アカデミア希望者向け」キャリアガイダンスを実施</li> <li>・企業と博士人材が相互交流するマッチングの場である「赤い糸会」の開催</li> <li>・博士人材のロールモデルを知るプログラム「Advanced COSA」（理系）、「Advanced COLA」（文系）の実施</li> <li>・道内外企業や地方自治体と連携して、大学院生が高度な専門性とトランスファラブルスキルを活かし、企業等が抱える課題に対してデータ分析等を通じて解決に向けた提案を行う「共同研究型インターンシップ」を実施</li> <li>・大学院共通授業科目にトランスファラブルスキルの習得等を目的とした科目群「社会実装プログラム群」設置</li> <li>・大学院共通授業科目で構成される教育プログラムで習得できるトランスファラブルスキル及び専門知識を学生に明示し、汎用的能力の獲得を促す仕組みを構築</li> <li>・博士学生が対象である「EXEX 博士人材フェローシップ事業」において、社会実装力を育成する共創教育プログラムや海外共修プログラムを必修化</li> </ul>	<p>B</p>
--	---	----------

	<p>(※構想 No.4 続き)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第5期中期目標期間におけるデジタル分野に係る大学院教育の充実・発展に向けた基盤の構築として工学部情報エレクトロニクス学科の入学定員を50人増員</li> <li>・本学の学生・教職員と自治体・地域の多様な関係者間での対話・交流の場としての「自治体×北大まるごと交流祭」や、本学の学生による各自治体での中高生向け交流授業の企画・運営</li> </ul>	
<p>5</p>	<p>学生が主体的に国際コミュニケーション能力、課題抽出・解決力、異分野融合展開力を培うことができるような<b>国際教育プログラムを整備</b>するとともに、多様な学修・交流の経験から身に付いた能力を可視化する仕組みを構築する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育改革室「国際教育戦略WG」において「本学が目指す国際教育の理想像について」報告書作成</li> <li>・全学教育科目における高年次での外国語能力向上に資する科目の2026年度開講に向け検討</li> <li>・国際的通用性を有する「オープンバッジ」によるデジタル学修歴証明の導入</li> <li>・博士課程学生のみを対象としていた外国大学との共同研究指導プログラム「コチュテル・プログラム」を「コーポレティブ・リサーチ・ガイダンス」として再編。対象を修士課程学生に拡大しつつ、一定の期間・条件下においてオンラインによる研究指導を認めることとし、デジタル空間も含めた国際的な研究指導制度を確立</li> <li>・教職員及び外国人留学生向け危機管理動画を制作</li> <li>・渡航前の学生及び教職員に向けて危機管理CBT（コンピューター・ベースド・トレーニング）を提供</li> <li>・一部の国際教育プログラムにルーブリックを用いた評価手法を導入</li> </ul>	<p>B</p>
<p>6</p>	<p>学生が安心して学修できるよう<b>経済支援制度の充実</b>を図るとともに、自然豊かなキャンパスの中で学生が正課の学びと課外活動を両立できる<b>修学支援環境</b>や、多様な学生が共存しながら学生生活を送ることができる<b>学生相談体制を整備</b>する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「EXEX 博士人材フェローシップ」、「次世代 AI 博士人材フェローシップ」による本学の博士定員 1/3 程度の博士学生へ生活費相当の経済支援及び研究費支援を実施</li> <li>・「北大・日立協働教育研究支援プログラム」による博士学生への生活費相当の経済支援及び研究費支援を実施</li> <li>・「北大・エア・ウォーター協働教育研究支援プログラム」による修士学生への生活費相当の経済支援及び研究費支援を実施</li> <li>・学生相談体制の拡充・強化を実現する包括的学生支援連携モデル構築の対象部局に「大学院教育学研究院/教育学院/教育学部」を選定し、教職員アンケートの実施・検証</li> <li>・学生からの相談にワンストップで対応する学生支援窓口「HOSSO (Hokudai One-stop Student Support Office/ホッソ)」を設置</li> <li>・学術情報の利用等に関するセミナー、ガイダンス等を実施</li> <li>・附属図書館による、プリント・ディスプレイのある学生への学習支援や学生ピアサポーターの活動支援</li> </ul>	<p>A</p>

	<p>(※構想 No.6 続き)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院生及び留学生を対象とした授業料免除制度の実施、検証</li> <li>・新渡戸カレッジ学部教育コース及び大学院教育コースにおいて、海外留学や海外における学修・研究の促進等を目的とした奨学金を支給</li> <li>・高等教育研修センターラーニングサポート部門における学習支援の在り方・効果等の検証、改善</li> <li>・ハイブリッド型教育に利用する教育用オープン教材の新規開発及び授業への導入</li> </ul>	
7	<p>国の方針や地域社会のニーズを踏まえた人材を育成するため、<b>企業や自治体等と連携して知や技術に関わる高度なリカレント教育プログラムを提供するとともに、イノベーション創出や課題解決を担う人材を活用し、新たな知の循環を生み出す教育プログラムを実施する。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「北海道大学リカレント教育プログラム実施要綱」の制定</li> <li>・リカレント教育プログラムにおいて、教員への報奨金を含むインセンティブ制度を制定</li> <li>・大学院教育推進機構に学外の有識者からリカレント教育の開発に資する助言を受ける「リカレント教育アドバイザー・ボード」を設置</li> <li>・リカレント教育プログラムの情報を学内外に発信するためのポータルサイトの開設及びリカレント教育プログラム受講料のオンライン決済システムの導入</li> <li>・産業界のニーズ調査等に基づき AI 倫理、経営者育成・新事業創出、医療 AI、GX、DX 等のリカレント教育プログラムを開設</li> <li>・自治体向けの BI (Business Intelligence) 及びデータサイエンス研修の実施</li> <li>・地域の課題解決に資するため、共生に焦点を当てた人材養成プログラム、研究開発等の現場と社会との間を橋渡しする人材養成プログラム、行政上のニーズを踏まえた防災分野の専門人材養成プログラムを開講</li> <li>・履修証明プログラム(2件)の文部科学省の「職業実践力育成プログラム」の認定及び厚生労働省の「教育訓練給付制度」の講座指定</li> </ul>	A

【講評】

本観点では、7つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している又は当初予定を上回って実施している状況であり、本観点の実現に向け全体を通じて適切に取組が実施されている。とりわけ、高度な専門性と幅広いスキルを有する人材を社会に輩出する取組として、博士人材育成コンソーシアムの活動における博士課程学生と企業等との交流促進や、キャリア教育プログラムの本学学生への提供、フェローシップ制度による経済的支援の拡充が挙げられる。また、新渡戸カレッジ、Hokkaido サマー・インスティテュート等による質の高い国際教育プログラムの実施や、リカレント教育プログラムの整備を通じ、グローバル社会や地域社会で活躍できる人材の育成が図られている。急速に進行する少子化をはじめとした社会情勢の変化に対応し、質の高い教育と修学環境を提供することで本観点を実現させるためにも、更なる取組の推進が期待される。



北海道大学は、広大かつ多様なフィールドを有し、幅広い科学領域を網羅しているという強みを生かし、イノベーションや課題の解決を通じて、世界トップレベルの研究力を更に向上させる。

No.	構想	実施状況	自己評価
1	<p>自由な発想のもとで本学の強みを生かして実施される、多様な研究の持続的な展開に資するとともに、卓越した研究を加速させる環境を整備する。</p> <p>また、異分野融合研究を促進する施策を全学的規模で実施するとともに、国内外の研究者との連携を強化する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「List サステナブル DX 触媒連携プラットフォーム」を設置しトップダウン型で研究領域を形成・推進する体制を構築</li> <li>地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）における領域選定と重点的支援制度を構築し「J-PEAKS 連携研究プラットフォーム事業」を開始</li> <li>研究開発機器共用の基幹システムである「GFC 総合システム」の機能改善</li> <li>「REBORN（Research Equipment Boosting and Reusing Network project）」による学内研究設備基盤の強化</li> <li>生産性の高い中小規模設備群を更新・高度化するなど基盤設備の効果的な整備の実施</li> </ul>	A
2	<p>化学反応創成研究拠点(ICReDD)やワクチン研究開発拠点(IVReD)を持続的に発展させるとともに、そのノウハウを活用しながら卓越した科学領域の新たな拠点化を推進し、世界的研究拠点群の形成を進める。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>化学反応創成研究拠点（ICReDD）「MANABIYA システム」による研究者及び企業の受け入れ</li> <li>ICReDD と SMatS（スマート物質科学を拓くアンビシャスプログラム）の連携による「アチーブメント・ポイント制」を導入した教育プログラムの策定・実施</li> <li>ワクチン研究開発拠点（IVReD）において、世界的研究拠点群の形成に向け、外国人研究者を特任准教授として雇用、又は招へい教員（客員教授）として受入。また、若手研究者を特任教員又は博士研究員として採用、自発的な研究活動を支援する「特任教員奨励研究制度」を構築するなど、人材育成を実施</li> <li>IVReD において、国際感染症学院感染症学専攻に「基礎ワクチン学講座」、「応用ワクチン学講座」及び「臨床ワクチン学講座」を設置し、大学院教育を通じた次世代を担う人材層の確保・育成を実施。大学院生 12 名（うち 7 名が留学生）が本拠点において研究に参画</li> <li>IVReD が強みとするインフルエンザ、コロナウイルス、結核を中心にワクチンの研究開発を推進。インフルエンザ及びコロナウイルス感染症不活化ウイルス完全粒子混合ワクチンの開発は、AMED「ワクチン・新規モダリティ研究開発事業」に採択。ワクチンの実用化に向けて研究開発を実施</li> <li>IVReD において、北海道のキタキツネから分離した高病原性鳥インフルエンザウイルス株をライブラリーに収蔵、国立感染症研究所と共有し、本株から作製したワクチン株（H5N1）が世界保健機関（WHO）において Candidate Vaccine Viruses として認定</li> </ul>	A

	<p>(※構想 No.2 続き)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2024年5月、厚生科学審議会感染症部会において、H5N1のプレパンデミックワクチン株としての備蓄が決定し、我が国のワクチンメーカーにおいて1,000万ドーズのワクチンの製造が開始され国家プロジェクトに貢献</li> <li>・人獣共通感染症GSと塩野義製薬との共同研究成果により創製されたCOVID-19治療薬の、日本における通常承認の取得後、国内のCOVID-19症例へ投薬</li> <li>・List サステナブルDX 触媒連携プラットフォームによる研究の進展に伴う研究成果をもとに、「脱炭素成長型地域経済の実現～グリーントランスフォーメーション (GX) 先導研究センター構想～」に係る構想を企画立案</li> </ul>	
<p>3</p>	<p>総合知による地域と世界の課題解決への貢献を目指すとともに、得られた知見を新たな研究に繋げる好循環を確立させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IVReDが強みとするインフルエンザ、コロナウイルス、結核を中心にワクチンの研究開発を推進。インフルエンザ及びコロナウイルス感染症不活化ウイルス完全粒子混合ワクチンの開発は、AMED「ワクチン・新規モダリティ研究開発事業」に採択。ワクチンの実用化に向けて研究開発を実施</li> <li>・IVReDにおいて、北海道のキタキツネから分離した高病原性鳥インフルエンザウイルス株をライブラリーに収蔵、国立感染症研究所と共有し、本株から作製したワクチン株（H5N1）がWHOにおいてCandidate Vaccine Virusesとして認定</li> <li>・2024年5月、厚生科学審議会感染症部会において、H5N1のプレパンデミックワクチン株としての備蓄が決定し、我が国のワクチンメーカーにおいて1,000万ドーズのワクチンの製造が開始され国家プロジェクトに貢献</li> <li>・人獣共通感染症GSと塩野義製薬との共同研究成果により創製されたCOVID-19経口治療薬の、日本における通常承認の取得後、国内のCOVID-19症例へ投薬</li> <li>・List サステナブルDX 触媒連携プラットフォームによる研究の進展に伴う研究成果をもとに、「脱炭素成長型地域経済の実現～グリーントランスフォーメーション (GX) 先導研究センター構想～」に係る構想を企画立案</li> </ul>	<p>A</p>

4	<p>国際競争力を有する先進的な情報環境を整備し、高性能な人工知能・機械学習手法の展開やデータ駆動型研究の推進など、<b>デジタル技術を最大限活用した研究手法の改革を加速させる。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学際大規模計算機システムの更新による演算性能及びストレージ性能の拡充、AI・機械学習分野におけるニーズ対応等による研究力強化</li> <li>・情報基盤センター国際共同研究論文投稿支援事業の実施、公募型共同研究（情報基盤センター萌芽型共同研究）による国際共同研究の推進</li> </ul>	B
5	<p>URA 組織を強化し、<b>高度できめ細やかな研究マネジメントを展開する。</b> また、研究を支える<b>技術職員が培ってきた知見や技術の継承と発展を組織的に進める。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・URA 認定制度による連携 URA・連携シニア URA の呼称の付与、本部と部局の最新情報を相互に共有するための定例ミーティングの実施、本部 URA の部局等への派遣</li> <li>・経営戦略を立案・実行できる URA 人材の育成を目的とした各種研鑽会、研修等の実施</li> <li>・JST による URA スキル認定制度や目利き人材育成プログラム、RA 協議会による URA 実務者養成講座等への参加</li> <li>・本部 URA の能力向上と人的ネットワーク形成を目的とした省庁等への出向</li> <li>・省庁をはじめとする関連機関との情報・意見交換の実施及びそこから得られた情報等をもとにした補助事業等大型外部資金の構想立案及び申請書作成支援や、研究者の外部資金獲得を促進する施策立案及び実施</li> <li>・論文データベースや分析ツールを活用した学内施策への情報提供及び実施、研究推進支援施策の立案及び実施</li> <li>・研究者と技術職員の連携を促進する「R&amp;T コラボPJ」において研究と技術の融合による成果創出の基盤を形成</li> <li>・未来の技術職員育成に貢献するアウトリーチ活動の一環として「市立札幌開成中等教育学校×北海道大学課題研究スタートアップセミナー」を開催</li> <li>・起業家精神を養い自ら課題解決を行うことができる人材育成を目的とした学生のものづくり支援プログラム「Spring/Summer Founders Program (SFP)」の実施（北大テックガレージ）</li> </ul>	A

6	<p>博士課程学生から教授ポストまでを見据えた切れ目のない人材育成システムを活用して、将来の研究拠点リーダー候補となる国内外の優秀な若手研究者を獲得・育成する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「アンビシャス特別助教制度」による採用及び研究活動費の支援、各種セミナー、ワークショップ等の開催</li> <li>・「アンビシャステニュアトラック制度」による採用、若手研究加速資金の支援及び将来の研究拠点リーダーの育成</li> <li>・「女性研究者アンビシャステニュアトラック制度」による採用、研究支援策の実施</li> <li>・文理融合共同研究に取り組む若手研究者を支援する次世代研究者リーダー育成共同研究助成の学内公募・支援の実施</li> <li>・若手研究者に対して部局・制度を越えた研究者交流機会の提供、学内の共同研究促進のマッチングサイト構築による本学研究者の共同研究の創出と支援制度の活用を促す体制の構築</li> <li>・部局テニュアトラック認定制度の全学への定着促進、同制度によるテニュアトラック教員の採用</li> <li>・日本学術振興会「研究環境向上のための若手研究者雇用支援事業」による特別研究員 PD 等の直接雇用制度（JSPS 特別研究員制度）の導入に伴い、「JSPS 特別助教制度」を設計</li> </ul>	B
---	--	--	---

**【講評】**

本観点では、6つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している又は当初計画を上回って実施している状況であり、本観点の実現に向け全体を通じて非常に高いレベルで取組が実施されている。顕著な例として、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）における「連携研究プラットフォーム事業」の開始といった、世界トップを狙う重点研究領域の戦略的展開と支援の実施が挙げられる。また、カーボンニュートラルの実現へ向けた「グリーントランスフォーメーション先導研究センター」の構築についても、世界規模の課題解決への貢献が期待される。加えて、ワクチン研究開発拠点（IVReD）においては、プレパンデミックワクチンの開発と国家備蓄への選定、国産初の経口 COVID-19 治療薬の社会実装等、新興感染症に対する国家安全保障に寄与する成果も大きい。時代と社会の要請に応える世界トップレベルの研究拠点として本学を位置づけ、VISION 実現の先導的役割を果たすため、引き続き高い水準での取組推進が期待される。



北海道大学は、社会との共創により、研究成果の創出や社会実装、地域と世界の将来を見据えた課題解決を推し進め、持続可能な発展や Well-being の実現に貢献する。

No.	構想	実施状況	自己評価
1	<p>地域と世界のニーズに対応すべく、自治体、企業、他大学等との協働体制を強化し、課題解決に資する知の創出及び人材育成を加速させるとともに、連携の繋がりを地域から世界へ広げていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会・地域創発本部(S-RED)における自治体との協働体制の整備、公的資金及び政府研究開発プロジェクトへの申請及び採択</li> <li>・函館キャンパスの地域水産業共創センターにおける道内外の企業や自治体との連携・交流の実施</li> <li>・地域中核大学イノベーション創出環境強化事業採択による社会連携・地域共創に係る事業推進</li> <li>・戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)「自分らしく生き、自分の意志で決定できる社会をつくる学びの北海道モデルの構築と展開」における岩見沢市との合意形成と運営体制構築</li> <li>・福島国際研究教育機構における農林水産研究の推進委託事業(F-REI)採択</li> <li>・魚介藻類養殖を核とした持続可能な水産・海洋都市の構築(地方大学・地域産業創生交付金事業)</li> <li>・北海道大学COI-NEXT「こころとカラダのライフデザイン共創拠点」(共創の場形成支援事業)</li> <li>・「持続可能でゆとりある社会システムデザイン」共創拠点の構築</li> <li>・北海道プライムバイオコミュニティ(内閣府認定地域バイオコミュニティ)の形成</li> <li>・「リカレント教育エコシステム構築支援事業」によるLPN(Leadership Program Network)の構築</li> <li>・LRA(ローカル・リサーチ・アドミニストレーター)認定制度による、実践的な人事交流の推進</li> <li>・自治体と連携し、ふるさと納税制度を活用した大学応援制度を創設</li> <li>・自治体と本学全体との組織的な連携のきっかけ・つながりづくりに向けて、「自治体×北大まるごと交流祭」や各自治体での交流授業の企画・運営を通じた自治体と本学の多様な関係者間での相互理解・関係構築に加え、連携のさらなる推進・深化に向けて、自治体連携に関わる様々な領域の教員・研究者とその事例を見える化し、自治体単独では対応困難な課題に多角的・専門的にアプローチするためのプラットフォーム「北海道大学・自治体連携フォーラム」の構想立案・計画設計・立ち上げ</li> <li>・自治体や企業と協働した、北大キャンパスを活用したプログラムの部局との共同企画・共同実施</li> </ul>	A


<p>2</p>	<p>豊かな人生の実現に役立つ生涯学習機能を充実させるとともに、大学の社会資産を活用して、幅広い年齢層を対象とした地域交流、社会連携等に資する取組を実施し、<b>地域と社会の活性化を推進する。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リカレント教育推進の体制整備として、「北海道大学リカレント教育プログラム実施要綱」の制定、大学院教育推進機構に学外の有識者からリカレント教育の開発に資する助言を受ける「リカレント教育アドバイザー・ボード」の設置、教育プログラムの情報発信ポータルサイトの開設</li> <li>・産業界のニーズ調査等に基づいて、AI 倫理、経営者育成・新事業創出、医療 AI、GX、DX のリカレント教育プログラムを開設。自治体向けには BI (Business Intelligence) 及びデータサイエンス研修を実施</li> <li>・共生に焦点を当てた人材養成プログラム、研究開発等の現場と社会との間を橋渡しする人材養成プログラム、行政上のニーズを踏まえた防災分野の専門人材養成プログラムを開設</li> <li>・オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」での学内外のコミュニケーションを促進するイベントやスタートアップ、イノベーションをテーマとするトークセッションの開催・実施支援。また、エンレイソウで展開されている情報の配信による、情報・知見交流の活性化</li> <li>・農学研究院と広報・社会連携本部が共同開催した札幌キャンパスにおける酪農学習体験等、児童・生徒や一般市民向けの北大キャンパスを活用したプログラムの部局との共同企画・共同実施</li> <li>・本学全学の学生・教職員と自治体・地域の多様な関係者間での対話・交流の場としての自治体×北大まるごと交流祭や各自治体での中高生向け交流授業の企画・運営</li> </ul>	<p>A</p>
<p>3</p>	<p>国内外に<b>産学連携拠点を構築し、拠点を軸とした研究成果の発信と社会実装を促進する。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北米、アジアに特化した産学連携拠点の設置、国際的な産学連携活動のハブとなる「産学連携グローバル推進室」の設置</li> <li>・産学連携グローバル推進室を中心とした海外展示会への出展による研究成果の発信</li> <li>・NTT とのビジョン共有型共同研究を開始</li> <li>・産業創出講座の設置による社会実装の促進</li> <li>・研究成果の活用や本学の特色を活かした「北大ブランド商品」の販売（4年連続全国1位）</li> <li>・札幌・北海道スタートアップ・エコシステム推進協議会との連携による HSFC による研究シーズの発掘から起業、事業拡大支援</li> <li>・大学発ファンド「北大 Green Frontier Fund」を設立準備</li> </ul>	<p>A</p>

4	<p>スタートアップに繋がる実践型アントレプレナーシップ教育を学生に実施し、<b>起業や新事業創出に挑戦できる人材を育成する。</b> また、その活動を地域の小中高校生にも展開する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生から中高生、大学・大学院生、そして社会人まで、幅広い層を対象にアントレプレナーシップ教育の展開</li> <li>・アントレプレナーシップの育成を目的としたガイドブック及び指導マニュアルを作成し、高校や大学への導入を促進</li> <li>・UC バークレーと JETRO が締結したスタートアップ支援に関する覚書への賛同</li> <li>・起業家精神を養い自ら課題解決を行うことができる人材育成を目的とした学生のものづくり支援プログラム「Spring/Summer Founders Program (SFP)」の実施（北大テックガレージ）</li> </ul>	A
5	<p>北海道全域に<b>スタートアップ・エコシステム</b>を展開し、新たに多数のスタートアップを創出させるとともに、<b>世界に通用するスタートアップ企業の育成を図る。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部によるスタートアップ支援</li> <li>・スタートアップ・エコシステムの構築に向けた新株予約権を取得する仕組みの整備</li> <li>・札幌・北海道スタートアップ・エコシステム推進協議会との連携による HSFC による研究シーズの発掘から起業、事業拡大支援</li> <li>・大学発ファンド「北大 Green Frontier Fund」の設立準備</li> <li>・UC バークレーと JETRO が締結したスタートアップ支援に関する覚書への賛同</li> </ul>	A
6	<p>良質な医療を提供するとともに、優れた医療人を育成し、先進的な医療の開発と提供を通じて社会に貢献する。 また、<b>未来を見据えた医療体制を構築し、持続可能な地域医療の中核を担う。</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北海道大学病院医療・ヘルスサイエンス研究開発機構「プロモーションユニット」における質の高い臨床研究の推進</li> <li>・特定臨床研究等の支援策として「スタートアップ支援事業」、「特定臨床研究等に対する研究支援」、「論文インセンティブ事業」「医師主導治験支援事業」「特定臨床研究支援強化事業」を実施</li> <li>・指導医のための教育ワークショップ及び指導歯科医講習会の開催</li> <li>・看護師特定行為研修指定研修機関として特定行為研修を開催</li> <li>・医療安全推進週間の取り組みの一環として臨床倫理に関わる講演会を実施</li> <li>・多職種合同研修の一環として臨床倫理研修を実施</li> <li>・新専門医制度基本領域登録者数の増加策の実施</li> <li>・「北海道大学病院総合災害対策本部（仮称）」の設置</li> <li>・「患者情報共有ネットワーク」による ICT を活用した医療機関等との相互連携</li> <li>・大規模災害や新興感染症等への対策を考慮した病院再開発整備計画の策定</li> </ul>	B

<p>7</p>	<p>本学の特色ある教育研究活動について、ウェブサイト、SNS 及びメディアリレーションなどを通じて戦略的に発信することにより、北大ブランドの価値を更に高め、国内外における多様なステークホルダーからの支持を獲得する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全学規模の記者会見及び記者懇談会の開催</li> <li>・ 本学の広報戦略、ブランディング戦略の前提となる「広報・パブリックリレーション活動の基本方針」の策定</li> <li>・ 広報誌「リテラポプリ」（日・英）及び「Spotlight on Research」（英）の作成</li> <li>・ 特設サイトや特設 SNS を利用した 150 周年に関する情報発信の実施</li> <li>・ オープン教材の開発による大学知の還元と教育コンテンツのオープン化の促進</li> <li>・ 総長コラム「President 's Column」（英）の掲載、総長対談「総長が行く『知の探訪』」の実施</li> <li>・ 社会的関心事である気候変動を特集した「気候変動に挑む」シリーズ、本学の優れたフィールド研究を紹介する「知のフィールド」シリーズの制作・発信</li> <li>・ 本学教員が出張講義等を通して高校生に知の最前線を伝える「アカデミックファンタジスタ」、中高生を対象に最先端の研究成果を紹介する「サイエンスレクチャー」をメディアと連携して企画・実施</li> <li>・ 学生参加型の広報・コミュニケーション活動の実施</li> <li>・ 広報特派員（広報インターンシップ）の受け入れ</li> <li>・ 研究者による SDGs 講義動画の製作・配信</li> <li>・ 英文公式ウェブサイトの全面リニューアルの実施及び英文マガジンサイトの新設</li> <li>・ 英文プレスリリースによる海外に向けた研究成果の発信</li> <li>・ 海外広報を推進する「広報アンバサダー制度」の新たな設置及びアンバサダーミーティングの開催</li> <li>・ 本学の現状や中長期的な価値創造の取組みを伝える「統合報告書」の年次発行</li> <li>・ 自治体と本学全体の教育・研究を活かした組織的な連携のさらなる推進・深化に向けたプラットフォーム「北海道大学・自治体連携フォーラム」の WEB サイトの構築</li> </ul>	<p>A</p>
----------	--	--	----------

【講評】

本観点では、7つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している又は当初予定を上回って実施している状況であり、本観点の実現に向け全体を通じて非常に高い水準で取組が実施されている。自治体との連携・交流については、SIP や COI-NEXT などの企業・自治体と連携した研究開発事業の実施や、本学全体と自治体との組織的な連携を推進する「北海道大学・自治体連携フォーラム」の設立が寄与している。研究成果の社会実装についても、全道プラットフォーム「HSFC」による研究シーズの発掘から起業、事業拡大支援等により、世界に通用する大学発スタートアップ企業の育成が図られている。また、「北海道大学リカレント教育プログラム実施要綱」の制定をはじめとした生涯教育の展開は、本学の知的資源を地域社会へ還元する取組となっている。総じて良好な進捗にあると言えるが、本学の基本理念に掲げる「実学の重視」を具現化する意味でも、引き続き高い水準での取組推進が期待される。

	北海道大学は、多様なバックグラウンドを持つ学生・研究者・教職員が活躍する国際的なキャンパスを実現し、様々な国・地域・組織の人々と連携・協働して世界の課題解決に貢献し、持続可能で豊かな未来社会を牽引する。
---	---

No.	構想	実施状況	自己評価
1	優秀な留学生の正規課程への受入れを促進するため、博士等の学位を取得した修了生が世界各国の大学等に職を得て後進を育成し、次世代の学生が本学に留学するという「知の好循環」の推進に向けた体制・環境を整備する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人留学生を対象とした進路選択に関する情報提供やスキルアップのためのセミナーの実施</li> <li>・Language Corner（留学生と日本人学生がテーマに沿って英語や日本語を学びあう場）、茶話会、レジデント・アシスタントによるイベント、日本語サロン等の実施</li> <li>・オンラインで完結する交換留学生受入・派遣システムの導入</li> </ul>	B
2	優秀な留学生の受入れを促進するため、一元的な情報発信、適正な資格審査、安全保障輸出管理の強化等を行うとともに、重点地域・国別戦略に基づき、従来の手法に加えてオンラインを活用した留学生リクルーティング活動を展開する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オンラインで完結する交換留学生受入・派遣システムの導入</li> <li>・大学院リクルーティング用ウェブサイトを構築し、大学全体のPR動画を作成するなど、一元的な情報発信を実施</li> <li>・適正な資格審査や安全保障輸出管理の強化のためにプレアドミッション・サポートシステムを導入し、部局の外国人留学生（大学院レベル）のリクルート業務を支援</li> <li>・優秀な留学生の受け入れを促進するため、リクルーティング促進事業を創設し、各部局の大学院留学リクルーティング活動を支援</li> <li>・留学生リクルーティング強化対象として設定した国・地域在住の北大留学志望者に向けて、独自開催のものだけでなく、JASSOや日本留学促進事業受託大学（秋田大学、岡山大学、東京大学等）が主催するウェビナーやハイブリッド説明会に頻繁に参加し、本学への留学情報を提供しつつ、参加者へのオンラインアンケートを実施して入学志望者のデータを収集分析</li> </ul>	A

<p>3</p>	<p>グローバルに活躍できる人材を育成するため、全ての学生に海外留学を含む多様な国際的学修機会を提供するとともに、全ての教職員にとって包摂的かつ魅力的な国際協働環境である「多文化共生キャンパス」を実現する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人留学生を対象とした現代日本学プログラム課程（MJSP）、インテグレイテッドサイエンスプログラム（ISP）の検証</li> <li>・海外協定校との海外ラーニング・サテライト（LS）、Hokkaidoサマー・インスティテュート（HSI）等の実施</li> <li>・「本学が目指す国際教育の理想像について」報告書の作成</li> <li>・全学教育科目における高年次での外国語能力向上に資する科目の2026年度開講に向けた検討</li> <li>・博士課程学生のみを対象としていたコチュテル・プログラムを「コーポレティブ・リサーチ・ガイダンス」として再編し、対象を修士課程学生に拡大するとともに、一定の期間・条件下においてオンラインによる研究指導を認めることとしデジタル空間も含めた国際的な研究指導制度を確立</li> <li>・教職員及び外国人留学生向け危機管理動画の制作</li> <li>・渡航前の学生及び教職員に向けた危機管理CBT（コンピューター・ベースド・トレーニング）の提供</li> <li>・一部の国際教育プログラムへのルーブリックを用いた評価手法の導入</li> <li>・外国人研究者本人や受入れ部局の教職員にとって有用な生活情報、学内手続き情報等を掲載した和英ウェブサイト（I-Colleague）の開設</li> </ul>	<p>B</p>
<p>4</p>	<p>全学的に関係を強化すべき協定校との戦略的パートナーシップを質・量ともに充実させることで、持続可能な社会の実現に向けた共同研究を活性化させ、国際共著論文の増加や、研究者・学生の国際交流の促進など、教育研究面での相乗効果を創出する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学の戦略的国際パートナーシップ校であるメルボルン大学（豪州）との研究交流推進のため、マッチングファンドによる共同研究ワークショップ開催支援事業（Hokkaido-Melbourne Joint Research Workshops Fund）を創設。また、博士課程Dual Degreeプログラム（ナノマテリアル分野）を開始。両校年間交流者数は3年間で10倍に増加し、両国で豪日交流資金、本学でJ-PEAKS、JSPS各種事業、メルボルン大学でARCセンターオブエクセレンス事業の採択につながるなど、共同研究の活性化を実現</li> <li>・戦略的国際パートナーシップ校であるマサチューセッツ大学アマースト校（米国）と共同研究シーズのためのマッチングファンド（HU-UMA Joint Research Seed Fund）を創設。また、技術職員の双方向交流を開始するなど、研究者や職員の国際交流を促進</li> <li>・戦略的国際パートナーシップ校であるソウル大学校（韓国）とは1998年以降毎年交互にホスト校となり、学術シンポジウムを開催し、学生を含む研究者の交流の場としての役割を継続</li> </ul>	<p>A</p>

<p>5</p>	<p>地域から世界規模の課題解決に貢献する          本学の優れた国際的な取組を          積極的に発信することによって、  <b>本学の国際プレゼンスを向上</b>させるとともに、          それを優秀な留学生の正規課程への受入れや          海外からの若手研究者獲得に繋げるための          取組を展開する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 広報アンバサダー制度の創設、広報アンバサダー委嘱、特設サイトの開設、広報アンバサダーミーティングの実施</li> <li>・ サステナビリティを共通言語として、学内外のエンゲージメント（一体感・共感）の醸成を図り、世界の課題解決に一層貢献できる大学になることを決意した「北海道大学サステナビリティ宣言」を策定し、英文でも発信</li> <li>・ 日本への留学志望者が参加するウェビナーや説明会（対面式およびハイブリッド）において、本学のSDGs推進に関わる取り組み、強み及び成果（THEインパクトランキングにおいて6年連続国内1位を獲得）を積極的に説明することにより、本学への正規留学や交換留学の魅力を発信</li> <li>・ 国際コンソーシアムUArctic（University of the Arctic／北極圏大学）に、日本から唯一の加盟機関として参画し、本学の国際プレゼンスを示すとともに、北極域研究センターをはじめとする学内関係部局と連携し、教育研究面での有効なネットワークを形成</li> </ul>	<p>A</p>
----------	--	--	----------

【講評】

本観点では、5つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している又は当初予定を上回って実施している状況であり、本観点の実現に向け全体を通じて良好な水準で取組が実施されている。コロナ禍からの回復を企図してWebサイト開設や本学の魅力を伝えるPR動画作成等の一元的情報発信による戦略的リクルーティング活動を展開するほか、海外協定校との戦略的国際パートナーシップを強化している。また、外国人研究者支援ウェブサイトの開設により受入れ環境の整備を進めるとともに、Hokkaidoサマー・インスティテュートをはじめとする質の高い国際教育プログラムを実施し、SDGs関連の取組と成果を積極的に広報することにより、本学の国際プレゼンスの向上を図っている。本学の基本理念「国際性の涵養」に通じる本観点にとって、これらの取組は、時代と環境の変化を乗り越えた国際協働の深化及び社会への国際人材の輩出に大きな貢献が見込まれる。






北海道大学は、学内の多様性・公平性・包摂性を保証する観点で、大学の教育研究環境を整備するとともに優れた人材の育成に寄与し、「ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言」の実現に向けて邁進する。

No.	構想	実施状況	自己評価
1	<p>大学構成員が意識・無意識から成る偏見や差別の理解と改善に向けて行動し、多様性を受容・包摂するマインドを持って学業・教育・研究を遂行できるように全学的な意識醸成を推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>古河講堂パープル・ライトアップ、障害者週間講演会等 DEI 講演会の実施</li> <li>「DEI NEWSLETTER」の発行</li> <li>女性研究者のロールモデルインタビュー実施、全国ダイバーシティネットワーク「OPENeD」（統括・大阪大学）における女性研究者ロールモデルコラム掲載</li> <li>ダイバーシティ&amp;インクルージョンの認知・認識に関する基礎調査</li> </ul>	B
2	<p>豊かな人間性と高い倫理観が育まれることを目指して、全ての構成員へのダイバーシティ&amp;インクルージョン教育を充実させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ダイバーシティ&amp;インクルージョン推進に向けた部局等による取組支援プログラム</li> <li>次世代リーダーシップ研究者円卓会議の実施</li> <li>全学教育科目「北大での学び」大学院共通授業科目「北大大学院での学び」での講義提供</li> <li>DEI FD 講演会、DEI 公開講座の開催</li> <li>「教職員のためのセクシュアル・ハラスメント防止ガイドブック」および研修動画の提供</li> <li>「ダイバーシティ&amp;インクルージョン図書展示」開催</li> </ul>	B
3	<p>ライフイベントなど個人の事由により構成員の活躍が制限されることなく、各自の能力を存分に発揮できる就学・就労環境と各種支援制度の整備を推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>研究活動とライフイベントの両立のための補助人材支援</li> <li>研究活動と女性リーダー活躍の両立のための補助人材支援</li> <li>一時保育、ベビーシッター利用育児支援</li> </ul>	B
4	<p>アイヌ民族との歴史的経緯を踏まえ、アイヌ民族にルーツを持つ学生・教職員が安心して過ごせる環境を整備するとともに、学内外のアイヌ民族とその他の大学構成員の共生に向けた取組を推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>附属図書館北図書館との合同企画としてアイヌ関連書籍の企画展示</li> <li>アイヌ民族に関する理解を深めるための全教職員を対象とする研修の充実化</li> <li>構内循環バスへのアイヌ語アナウンスの導入</li> <li>北海道大学生生活協同組合との共催でアイヌ料理フェアを開催</li> <li>アイヌ民族に対する差別的言動を防止するためのリーフレット等を配布</li> <li>全学教育科目「北大での学び」大学院共通授業科目「北大大学院での学び」でアイヌ民族に関する講義</li> <li>本学主要広報誌「概要」「統合報告書」「サステナビリティレポート」のタイトルへのアイヌ語併記</li> </ul>	B

5	<p>全ての研究者が性差による格差を乗り越え、各自の能力を最大限発揮できる研究環境の実現に向けて、機会均等の取組を継続するとともに、上位職の女性研究者の比率向上に向けた人材育成及び活躍支援の取組を一層推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「リーダー育成共同研究助成」の実施</li> <li>・「メンタリング・シャドウイング研修」、「ビジュアル作成コンサルティング支援」、「PIを目指す女性研究者による研究会等開催支援」の実施</li> <li>・「PIを目指す女性研究者向けリーダー育成セミナー」、上位職スキルアップ研修の実施</li> <li>・次世代のリーダーとして期待される女性教員を顕彰する「桂田芳枝賞」の創設、表彰</li> <li>・「北大女性教授ネットワークの会」開催</li> </ul>	B
6	<p>学内に女子学生、留学生及び障害を有する学生など多様な学生の受入れを促進するための取組を充実させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本学研究者が知の最前線を出張講義等で高校生等に伝える事業「アカデミックファンタジスタ」の実施</li> <li>・研究者を目指す優秀な女子学生育成のため、「大塚賞」受賞者のメッセージ動画を配信</li> <li>・女性研究者ロールモデル講演会、女子学生キャリアパスイベント、キャリアイベント開催支援の実施</li> <li>・札幌開成中等教育学校 PT 会講演会、進路選択を語る講演等（高校生対象）の実施</li> <li>・体験型理科実験教室、北大獣医学部体験スクール（中学生対象）の実施</li> <li>・ユニバーサルデザインに配慮した施設環境の整備（トイレサイン、エレベーター車いすマーク等）</li> <li>・札幌キャンパス及び函館キャンパスバリアフリーマップの作成</li> </ul>	B

【講評】

本観点では、6つの構想全てにおいて、構想に関連する取組が十分に実施されており、本観点の実現に向け全体を通じて概ね順当に取組が実施されている状況にある。女性・若手研究者の採用促進のため、リーダー育成共同研究助成や、研究活動とライフイベントの両立を支援する制度の整備など、当事者である教員・研究者の多様性推進に向けた制度運用が着実に進められている。また、アイヌ民族について学ぶ大学院教育の開始や主要広報誌へのアイヌ語タイトルの併記など、地域文化の理解促進に資する取組も実施されている。さらに、ユニバーサルデザインに配慮した施設整備やバリアフリーマップの作成を通じ、誰もが安心して学べる環境の構築を進めている。『北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言』に掲げる「多様性にひらかれた教育・研究環境」の実質化に向けて、地域特有の状況も踏まえた取組が広範に実施されていると言える。しかし、とりわけ構成員の意識醸成のように、急速に達成されうるものではない目標も含まれるのがこの観点であるため、各種取組を中長期的に継続させていくことが求められる。


	北海道大学は、総長のリーダーシップを支える執行部の役割分担と緊密な連携により、適正かつ透明性の高い意思決定を行うとともに、構成員が誇りと希望と充実感を持って価値創造できる基盤を整備し、広く社会に認められる大学運営を実現する。
---	--

No.	構想	実施状況	自己評価
1	執行部の役割分担と連携の実効性を高めるとともに、 <b>次世代の大学経営</b> を見据え、本学を取り巻く環境に応じた <b>最適な意思決定プロセスの実現</b> に向けた組織体制を整備する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総括理事が担う役割の明文化並びに総長及び総括理事に対する支援機能を強化することにより、総長及び総括理事の緊密な連携を担保し、戦略的に企画及び調整を行う「経営企画本部」の設置</li> <li>・経営課題に関する情報提供及び当該情報に関する役員による自由な意見交換の場である役員意見交換会の随時開催</li> <li>・各理事が所掌する重要な経営課題を定期的に役員間で共有・議論する仕組みの導入</li> </ul>	B
2	本学の IR データの可視化・共有基盤である北海道大学 Business Intelligence(北大 BI)を有効に活用し、 <b>エビデンスに基づいた施策立案機能</b> を向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エビデンスに基づく施策立案の促進を目的とした総合 IR 本部による学内コンサルティングの実施</li> <li>・北大 BI におけるデータの更新頻度向上による分析の精緻化</li> <li>・IR データ収集システムにおける検索機能の充実及びデータ共有操作の簡便化等の機能強化の実施</li> </ul>	A
3	高い倫理観に裏打ちされた公平公正な大学運営を堅持し、本学の社会的信頼を高めるため、 <b>コンプライアンスを推進・徹底</b> する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総長選考・監察会議による総長の「業務執行状況の確認」及び「業績評価」の手法等の不断の見直し</li> <li>・学内構成員の監事業務に対する理解を深め、監事への学内情報伝達機能の強化を図るため、学内会議等を活用した周知・啓発及び監事と各部局長との個別意見交換の実施</li> <li>・コンプライアンスに関する研修の実施状況を把握するための全学的調査の実施</li> <li>・コンプライアンスに関する研修等の好事例や取組が遅れている分野を補完する研修の実績及び全学調査の結果の全学への通知</li> <li>・化学物質の取扱いに係る全学一斉点検の実施</li> <li>・研究活動に関する不正防止研修（eラーニング）の実施</li> <li>・研究公正支援システム（RISS）の導入、稼働</li> <li>・教職員、EXEX・次世代 AI 博士人材フェローシップ制度に採択された全学生、特別研究員を対象とした、研究費の不正使用に係る行動規範、意識啓発等についての浸透状況や認知度等の確認、改善事項の周知、徹底</li> <li>・大学院共通授業科目「北大大学院での学び」における研究公正に係るプログラムの提供</li> <li>・安全保障輸出管理に係る学内監査の全部局対象での実施</li> </ul>	B

	(※構想 No.3 続き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報周知のための、構内循環バス車内ディスプレイにおける研究インテグリティに関するスライドショーの実施</li> <li>・利益相反申告システムの導入、稼働</li> <li>・人を対象とする生命科学・医学系研究に関する手続き等説明会の開催</li> <li>・全教職員を対象とした情報セキュリティのeラーニング研修、標的型メール攻撃訓練、学生を対象とした全学教育科目、オンライン教材によるセキュリティ教育の実施</li> </ul>	
4	業務の標準化・平準化による生産性の向上と、 情報通信技術を駆使した「どこでも仕事ができる職場環境」の構築により、 多様な働き方を実現するとともに、 教職員一人一人が未来を切り拓くための 新たな職務に邁進できる環境を整備する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局職員の執務用パソコンを原則可搬型としたことによる、テレワークとオフィスワークを選択できる多様で柔軟な働き方である「ハイブリッドワーク」の導入</li> <li>・先端的なセキュリティ技術「NetOne-SOC (Security Operation Center)」の導入</li> <li>・教職員の時間創出に向けた学内の会議体・議案・委員を見直すためのガイドラインの整備及びそれに基づいた見直しの実施</li> </ul>	B
5	教職員が意欲を持って職務を遂行するため、 教員と事務職員等の適切な役割分担に基づく 協働や組織的な連携体制を確保するとともに、 意欲的な若手教職員が大学運営に参画できる 仕組みを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若手・中堅教職員を対象とした経営層への登用を見据えたマネジメント研修制度及びキャリアパスの構築</li> <li>・教職員の時間創出に向けた学内の会議体・議案・委員を見直すためのガイドラインの整備及びそれに基づいた見直しの実施</li> </ul>	B
6	自律的な自己点検・評価に基づいて、 大学全体が一体となって改善と向上に 取り組める体制を整備するとともに、 多様なステークホルダーからの理解を 得られるよう、大学の運営体制や価値創造能力 をわかりやすく社会に発信する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質保証推進本部における、評価 BI を活用した客観的データに基づく迅速かつ効果的な質保証の実施・公表</li> <li>・統合報告書の発行による、本学の現状や中長期にわたる価値創造に向けた取組等、本学の強み・特色の多様なステークホルダーへの積極的な情報発信</li> </ul>	B

【講評】

本観点では、6つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している又は当初予定を上回って実施している状況であり、本観点の実現に向け全体を通じて適切に取組が実施されている。とりわけ、本学の重要課題であるガバナンスの改革・強化については、経営企画本部の設置により、総括理事が担う役割の明文化、総長及び総括理事に対する支援機能の強化、総長及び総括理事の緊密な連携を担保するとともに、戦略的に企画及び調整が行われている。また、総合 IR 本部においては、学内コンサルティングの実施、北大 BI の更新頻度向上を通じた分析の精緻化等によるエビデンスに基づいた施策立案機能の向上が図られており、意思決定プロセスの適正化と大学運営の透明性向上に貢献している。一方、近年の DX 化と連動した、情報通信技術をベースとした多様な働き方を認める職場環境については、制度面の整備を含めた未来志向の柔軟な対応がよりいっそう必要になると考えられる。


	北海道大学は、多様かつ強固な財源の拡大による自律的経営と「人材・知・資金の好循環」による持続的成長を実現する。
---	---

No.	構想	実施状況	自己評価
1	クラウドファンディングの活用や、ステークホルダーとのネットワーク強化等によりフロンティア基金など寄附金を大幅に拡大するとともに、それらを原資とした戦略的な資金運用を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファンドレイザーの増員により寄附募集体制を強化し、道内外での渉外活動を積極的に展開</li> <li>・パンフレット、WEB サイト及びイベントへのブース出展による創基 150 周年記念事業「人材育成事業」「古河講堂の改修・利活用事業」「こども本の森事業」の広報</li> <li>・READYFOR 株式会社と包括契約を締結し、北大クラウドファンディング制度を創設</li> <li>・校友会・同窓会等と連携し、同窓生に向けた創基 150 周年記念事業及び記念募金のトップセールスを推進</li> <li>・本学と同窓生をつなぐプラットフォームツール「アルムナイ・コミュニケーション・ベース ELM TREE」の整備</li> <li>・企業等との接点づくりと関係強化を目的として、企業シンポジウムや学内ツアーを開催</li> <li>・業務上の余裕金の運用にかかる文部科学大臣の認定基準 3（収益性の高い金融商品を含む自家運用）及び 4-2（株式等の自家運用対象外の金融商品を含む委託運用）について認定を取得</li> <li>・新たな資金運用方策として中長期的な視点による運用規模の拡大を目的に株式を含めた委託運用を開始</li> </ul>	B
2	広大かつ特色豊かなキャンパスが有する資産価値の最大化に加え、リカレント教育プログラムや国際教育プログラムの積極的な展開等により、新たな収益モデルを構築する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「職員宿舎の基本方針」に基づき順次活用計画を策定し、平岸住宅跡地の土地貸付を実施、中央第一宿舎（12 号棟）跡地の土地貸付を決定</li> <li>・リカレント教育プログラムにおいて、教員へのインセンティブ及び将来的な自走化を見据えた利益確保、経営的収入への寄与を実現するため、受講料の新たな算出方法を設定するとともに、報奨金を含むインセンティブ制度を制定</li> <li>・キャンパスの資産価値の有効活用等に関する基本方針の策定</li> <li>・キャンパスツアー等の有料キャンパスプログラムの企画・実施</li> <li>・外部事業者向けの認定キャンパスプログラム制度の検討</li> </ul>	B

3	<p>大学病院や動物医療センターにおいて良質・先進的な医療を提供することにより、社会貢献を通じた収益の拡大を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導医のための教育ワークショップ及び指導歯科医講習会の開催</li> <li>・看護師特定行為研修指定研修機関として特定行為研修を開催</li> <li>・「患者情報共有ネットワーク」による ICT を活用した医療機関等との相互連携</li> <li>・大規模災害や新興感染症等への対策を考慮した病院再開発整備計画の策定</li> <li>・「Human Animal Bond 推進室」の設置による獣医療ソーシャルワークの立ち上げ</li> <li>・良好な職場環境の形成を通じた良質の獣医療の提供のための教員を対象とした「ANA アサーション研修」の開催</li> <li>・高度獣医療の提供に不可欠な最先端放射線治療装置の導入計画の策定</li> </ul>	B
4	<p>社会との共創により、保有する知的資産のライセンス収入や間接経費及び受託事業等、経営的収入の拡大を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・BI ツールを活用した研究者探索により有望研究者の発掘を行うとともに、企業に対して産業創出講座設置に向けた研究シーズ提案や共同研究費の大型化提案を実施</li> <li>・民間企業等との共同研究及び学術コンサルティング推進のため教員に対するインセンティブ制度の導入</li> <li>・北米、アジアに特化した産学連携拠点の設置及び国際的な産学連携活動のハブとなる「産学連携グローバル推進室」の設置</li> <li>・特許ライセンス契約の締結に必要な追加実証の資金を支援する「特許ライセンス加速資金」による支援</li> <li>・本学の研究成果や本学の特徴を活かした「北大ブランド商品」の継続的開発、北海道大学フェアの開催</li> <li>・国際共同研究の間接経費比率の 40% への見直し</li> <li>・企業との共同研究費を簡便かつ効率的に試算する費用見積ツール「見積先生」の導入</li> <li>・ネーミングライツ契約の成立、デジタルサイネージにおける収益性の高い事業への組み換え</li> </ul>	B
5	<p>「人材・知・資金の好循環」を推進するため、新たな投資財源の確保や予算配分システム改革を実行する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・総長のリーダーシップにより戦略的・重点的な資源配分を可能とする「HU VISION 2030 加速・強化経費」制度の構築</li> </ul>	B

【講評】

本観点では、5つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している状況であり、本観点の実現に向け全体を通じて適切に取組が実施されている。大型の収益獲得策としては、創基 150 周年記念事業及び記念募金のトップセールスを推進するとともに、業務上の余裕資金に係る文部科学大臣の認定を取得し、委託運用を開始したことが挙げられる。また、教職員宿舍跡地の有効活用を進め、キャンパス資産価値の拡大にも努めている。ほかにも、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）等の補助金を受け入れ、研究力強化に資する財源を重点的に確保しているほか、クラウドファンディング、ネーミングライツ等により多様な収入源を拡充している。大学を取り巻く厳しい財務状況は今後も続くことが見込まれ、本学の中長期的な発展に向けた安定的な財務基盤をより迅速に確立するためにも、取組のさらなる推進が求められる。

	<p>北海道大学は、広大で豊かなフィールドをもとに形作られたキャンパス環境を基盤とした物的・知的資産を最大限に活用し、教育・研究・社会との共創を通じて「持続可能な社会」を実現する社会変革を先導する。</p>
---	---

No.	構想	実施状況	自己評価
1	<p>持続可能な社会の創り手を育成するため、SDGsの基礎を体系的に学修し、その展開力を身に付けるための教育を推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生のSDGsに関する意識や理解の向上を図るため、学部学生及び大学院学生の全入学生を対象とした新たな授業を実施</li> <li>展開力を身に付けるための教育として、札幌市と連携し、大学院学生を対象としたワークショップ及び大学院共通科目を開発・実施</li> </ul>	A
2	<p>持続可能な社会の構築に向けた本学の取組に関する情報の集約・発信力を更に向上させ、価値観を共有した国内外のステークホルダーとの連携を強化するとともに、キャンパス内での諸活動の継続的・多面的な検証を通じて、社会への効果的な還元につなげる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学内のSDGsに関する取組を集約・データベース化し「北海道大学×SDGs」Webサイトにより情報発信</li> <li>SDGsに係る全学的なフォーラム、シンポジウム等を国、自治体、企業等の共催で開催（「SDGs北海道セミナー」、北海道大学×STV「SDGsデー」、 「自治体×北大まるごと交流祭」、和歌山県古座川町と連携した現地集中講義（フレッシュマン実習）等）</li> <li>出版社が企画する広告記事及びSDGs関連イベントとタイアップした特集広告等、大学外部の主体が発行する広報媒体を通じた持続可能な社会の構築に向けた取組を情報発信</li> <li>「札幌SDGs先進企業認証制度」の認証審査に参画し、持続可能な社会の構築に向けた専門的知見を地域へ還元</li> <li>上記取組の成果として、大学の社会貢献の取組を国連のSDGsの枠組みを使って可視化するランキングである英国Times Higher Education (THE) による「THEインパクトランキング」において6年連続国内1位を獲得している</li> <li>また、企業の気候変動への取組を投資家や市場に開示し評価する国際的な環境情報開示システムである「CDP気候変動質問書」において3年連続で上位レベルである「マネジメント」を獲得している</li> </ul>	A
3	<p>本学のキャンパスやフィールド資源を、社会の課題解決に向けた実証の場となるリビングラボラトリとして活用し、省エネ・創エネと施設の環境性能向上や生物多様性の保全に向けた取組を通じて脱炭素社会の実現を図り、持続可能な発展に寄与する研究成果を世界に発信し貢献する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>サステナビリティ推進機構にカーボンニュートラル推進部門の設置</li> <li>札幌キャンパス及び研究林の自然共生サイトへの認定による持続可能な環境配慮型社会の構築への貢献</li> <li>カーボンニュートラル達成に貢献する研究を社会実装するための実証実験の実施</li> <li>GHG排出量等について体系的にまとめた「北海道大学GHGインベントリ2022」を策定</li> </ul>	A

	(※構想 No.3 続き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・洋上風力を中心とした再生可能エネルギー関連産業の健全な成長と発展に貢献する人材育成及び関連研究を実施するための教育研究拠点として、「リニューアブルエナジーリサーチ&amp;エデュケーションセンター (REREC)」の構築</li> <li>・グリーントランスフォーメーション (GX) 教育研究拠点として、持続可能な社会の構築に不可欠なカーボンニュートラルの実現に貢献する「GX 先導研究センター」の構築</li> </ul>	
4	SDGs の達成に貢献するイノベーション・コモンズ(共創拠点)の実現に向け、建設資源の有効利用にも配慮したキャンパスマスタープランを策定し、これに基づく施設の整備や長寿命化を進めることで、歴史的建造物やランドスケープを継承・活用しつつ、全ての大学構成員の Well-being の実現や生産性の向上を志向した、 <b>持続可能で周辺環境と調和したキャンパスを構築する。</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会のニーズに適応した教育・研究活動拠点並びにパブリックスペース及び本学固有の歴史的建造物・ランドスケープ資産の整備を通じた、SDGs の達成に貢献するイノベーション・コモンズ (共創拠点) の実現</li> <li>・札幌キャンパス及び研究林の自然共生サイトへの認定による持続可能な環境配慮型社会の構築への貢献</li> <li>・インフラ長寿命化計画の改訂、既存施設のスペースの再配分による新たな研究スペース確保等の実施</li> </ul>	A
5	本学の構成員一人一人が矜持と尊厳を持って活動し、自らの可能性への挑戦を通じて個々の能力を最大限発揮することができるよう、 <b>「SDGs」を共通言語とした一体感の醸成と倫理観の浸透</b> に向けてあらゆる機会を提供し、大学としての総合力を向上させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員の SDGs を含むサステナビリティに関する意識や理解の向上を図るため各部局等に対して出張 FD・SD の実施</li> <li>・サステナビリティを共通言語として、学内外のエンゲージメント (一体感・共感) の醸成を図り、世界の課題解決に一層貢献できる大学になることを決意した「北海道大学サステナビリティ宣言」の策定及び同宣言の教職員への浸透を図るための出張 FD・SD の実施</li> </ul>	B

【講評】

本観点では、5つの構想全てにおいて、構想に関連する取組を十分に実施している又は当初予定を上回って実施している状況であり、全体を通じて非常に高い水準で取組が進められている。「北海道大学サステナビリティ宣言」の策定は、学内外のエンゲージメントの醸成を図り、行動変容に繋がるものである。また、雨龍研究林及び札幌キャンパスが環境省の定める自然共生サイトに指定され、生物多様性保全に貢献しているほか、GHG 排出量等を体系的に整理した「北海道大学 GHG インベントリ 2022」の策定により、脱炭素社会の実現に向けた基盤を構築している。こうした取組の成果は、「THE インパクトランキング」において6年連続国内1位を獲得していることや、「CDP 気候変動質問書」において国際的な情報開示基準に沿った透明性の高い報告により3年連続で上位レベルの「マネジメント」を獲得していることなど、国際的な評価の高まりとして表れている。「持続可能な Well-being 社会」の構築に向け、本観点の取組が今後も先導的役割を果たしていくことが期待される。